

『サステナブルツーリズム —地球の持続可能性の視点から—』

藤稿 亜弥子 著

農業・農村領域 主任研究官 國井 大輔



『サステナブルツーリズム
—地球の持続可能性の視点から—』
著 者／藤稿 亜弥子
出版年／2018年
発行所／晃洋書房

「サステナブルツーリズム」という言葉を御存知でしょうか。「持続可能な観光」と訳されるこの言葉は、本書によると登場してから20年以上が経つものの、まだ認知度が低く、誤解も多い言葉となっているようです。一方、2015年の国連総会で持続可能な開発目標いわゆる「SDGs」が採択されてから、「持続可能」という言葉を頻繁に目にするようになり、2020年6月には「持続可能な観光ガイドライン」が観光庁により策定されました。農山漁村地域の活性化策として期待される農山漁村滞在型旅行である「農泊」に対しても、今後「持続可能性」が重要なキーワードとなる可能性が高いと考えられます。

本書は「サステナブルツーリズム（以下、ST）」に関する入門書であり、全体を通して多くの図表を用いて初心者にも分かりやすい構成となっています。特に、環境問題等に関するトピックについての『解説』やSTに関する『ケーススタディ』が豊富に掲載されており、STの背景にある環境問題や具体的な事例を通して、STについて多角的に学ぶことができる良書となっています。

第1、2章では、STの歴史的な流れとその定義を整理し、第3章では環境問題とSTとの関係を整理します。それらを踏まえ、第4章では実際にどのようにSTを実践すべきかを事例を交えながら紹介しており、最後の第5章で本書のまとめをしています。

STのルーツは、1980年の世界保全戦略で提唱された、環境保全と経済発展の両立を目指す「持続可能な開発」に遡ります。その後82年の国連自然保護連合（IUCN）による「エコツーリズム」の提唱や92年の地球サミットの「アジェンダ21」を経て、93年にST専門の学会誌として「サステナブルツーリズム学会誌」が創刊されたことにより、STの研究や議論が進みます。そして、2000年に国連で提唱されたミレニアム開発目標（MDGs）への貢献を目指し、2007年に国連環境計画（UNEP）と国連世界観光機関（UNWTO）主導のもと「サステナブルツーリズム基準策定のためのパートナーシップ」が設立され、STが観

光業界全体に広がり始めました。

STの実現にとっては、まずその定義を明確にし、評価・モニタリングすることが重要です。UNWTOではSTを『旅行者、観光関連産業、自然環境、地域社会の需要を満たしつつ、現在及び将来もたらず経済面・社会面・環境面の影響も十分に考慮に入れた観光』と定義し、経済・社会・環境を重要な要素としています。また、STの評価基準は様々な国や組織で開発され、特にグローバル・サステナブルツーリズム協議会が策定した国際基準（GSTC）が有名です。また、STの取組の信頼性を証明するために様々な認証制度が提案され、中でもGSTCを用いた国際的なSTの認証である「グリーン・グローブ（Green Globe）認証」や「GSTC認証」等が広く知られており、近年ではヨーロッパの観光業者を中心として「トラベライフ（Travelife）認証」も注目されています。

観光産業は、エネルギー消費による温室効果ガス排出や自然資源の利用、水の過剰利用、廃棄物等により環境に様々な負荷を与えており、STの実践には、環境への配慮が欠かせないものとなっています。カーボンオフセットを取り入れた観光コンテンツや、生物多様性への影響を最小限に抑えるように配慮した自然共生型観光等の環境的持続可能性に重点を置いたSTを実践するには、膨大な初期費用やランニングコストがかかることがあります。けれども、このようなコストを支払ってでも、STを実践することにより結果的には大幅なコスト削減につながり、事業者の経営や観光地の利益にプラスの影響を与えることが期待されます。

著者は本書の最後で、既に多くの事業者や行政がST実現のために試行錯誤をしているところであるが、重要なことは、社会全体・業界全体がSTの実現を目指して具体的な努力を重ねていくことではないか、と結んでいます。